【分校】令和３年度　京都府立綾部高等学校（分校全日制）　学校経営計画（スクールマネージメントプラン）　（実施段階）

学校経営方針(中期経営目標)	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
・学力の向上と希望進路の実現 ・基本的生活習慣の確立 ・基本的人権を尊重する態度と豊かな人間性 の育成 ・健康及び体力の維持・向上 ・地域社会から信頼される学校づくりの推進	＜成果＞ ◇新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、地域との連携事業の多くが中止となった。そのような中でも、即売会と東祭の販売においては感染予防の対策をしながら、ほぼ昨年と同程度の取組を実施するなど、特色ある学校づくりを推進した。 ◇学校農業クラブの行事が縮小されるなかでも、情報処理競技会や資格取得、オンラインでの学習発表会等、一定の成果を上げることができた。 ◇保護者や中学生等への広報については、タイムリーなホームページの更新を心がけた。また、学校紹介動画を複数回作成し、本校の教育活動の魅力を発信した。 ◇進路指導については低学年からの進路ガイダンス等の進路学習を実施し、早期に目標を持たせ、生徒の希望進路実現に向けた指導を計画的、効果的に行うことができた。 ◇登校時と朝のＳＨＲでの健康観察により、生徒の状況を丁寧に把握する等、新型コロナウイルス感染症拡大防止に努めた。 ◇文化祭のステージ発表や体育祭のダンスパフォーマンス等で生徒は主体的に活動し、学校祭を成功させた。ここ数年、学校祭に対する生徒の満足度が上がってきている。 ◇分析化学部が「SDGｓQuestみらい甲子園」で関西アクション大賞、公益財団法人社会貢献支援団体から「社会貢献者表彰」を受賞した。 ＜課題＞ ◆家庭への連絡等はより一層丁寧にし、信頼される学校づくりに努める必要がある。 ◆安全・安心な学校環境づくりを心がけ、組織的な取組により、落ち着いた学校づくりに努める。 ◆地域・関係機関・各種団体等との連携を更に強めるとともに、由良川キャンパスの特色のＰＲに努め、生徒募集の充実を図る。 ◆新型コロナウイルス感染症の影響で実施できなかった生産物の外部販売をコロナ禍においていかに工夫していくかが今後の課題である。 ◆４Ｓ運動は教職員の意識の高まりとともに定着してきているが、さらに推進していく必要がある。 ◆教育活動のＩＣＴ化に向けての環境は一定整備されたが、教員のＩＴリテラシー向上が課題である。	■Ａ・Ｇ・Ｐ（Ayabe Global Program)の推進 〈スマートスクール〉 ・ＩＣＴを活用した授業　・ＢＯＹＤを活用した授業 ・業務のスリム化　・Slackの活用（ペーパーレス化・会議レス化） 〈探究活動〉 ・思考力・判断力・表現力の育成　・ＳＤＧｓを授業や部活動へ 〈地域発信〉 ・アンネのバラ園を拡充　・地域でのボランティア活動 ・生産物の外部販売を推進（西町アンテナショップでの販売） ・綾高ブランドの開発 〈連携事業〉 ・京都先端科学大学　・北部産業創造センター ・保育園や小中学校への出前授業　・農業体験授業 ■３Ｑ・４Ｓ＋Ｓ（スマイル）の推進 ３Ｑ 〈Quality Teacher〉　教師としての資質向上 〈Quality School〉　教育内容の充実 〈Quality Students〉　未来を切り拓く人材の育成 ４Ｓ＋Ｓ〈スマイル〉 〈整理〉〈整頓〉〈清潔〉〈作法〉＋〈スマイル〉 整理整頓を心がけ、清潔な職場・学習環境を整える TPOに応じた言動を心がける 明るく元気に、笑顔がある学校 ■学校農業クラブの活性化

分掌教科	項目（重点目標）	具体的方策及び数値目標	評価			成果と課題
組織運営	魅力ある学校づくり	これまでの農業関係推進事業のノウハウを生かし、官・民・学との連携を一層充実させる。	B	B	B	◆コロナ感染予防のため多くのことが制限されたが、地元の酒造メーカーとの連携等、連携事業を進めることができた。様々なツールを利用し、広報活動を充実させることができた。
		在校生やその保護者にタイムリーな情報発信に努める。また、中学生とその保護者、地域の方々に本校の教育活動を理解していただくため、広報活動を充実させる。	B			
教務部	学習意欲の向上と授業規律の充実	生徒の学習意欲を高め学力が向上する学習環境作りを進める。	B	B	B	◆全体的に落ち着いた雰囲気での授業が展開できた。一部規律が守れない生徒がいることから、更なる指導強化が必要である。
		定期考査前の１日平均の家庭学習時間（分）を100分以上となるよう指導する。（100分以上ならＡ，80分以上ならＢ,それ以下ならＣとする）。	B			
総務企画部	生徒募集	由良川キャンパスの魅力を学校案内や通信・ＨＰ等を通じて、中学生へアピールする。	A	B	B	◆中学生向け学校公開は新型コロナ感染症の影響で見学会の中止、学校公開の日程変更など予定どおりに進まなかったが、その分をカバーするよう内容を工夫して実施することができた。 ◆中学校教員向けの学校公開も好評であった。
		中学生向け学校公開を年４回、中学校教員向け学校公開を年４回実施し、その内容を充実させ、学習内容を十分理解した上で入学できるよう工夫する。	B			
生徒指導部	自らの行動を振り返りながら新しい目標を作り、主体的に行動に移していける力を育てる。	授業を大切にし、机脇にかけたスマートフォン袋の積極的活用に取り組む。 生徒指導部預かり件数　５件以内：Ａ　10件以内：Ｂ　11件以上：Ｃ	A	B	B	◆授業時間中のけじめは、おおむね確立してきた。ただしスマートフォン袋の積極活用には至っていない。 ◆今後も引き続き、積極活用を周知し、授業ルールの１つとして確立できるようにしていきたい。
		職員室の出入り口で正しい挨拶や返答ができるよう習慣化する。	B			

進路指導部	生徒ひとりひとりの希望実現に向けて方策を講じる。	進路アンケートをとることを通じて、生徒の進路希望を把握し、不安の解消に努める。	B	B	B	◆進路アンケートを各学年で実施し、進路指導室の整頓をファイルボックスを利用して行なった。進路希望実現100%を目指したが、96%であった。ただし、配慮を要する生徒への進路対応は第３学年部と協力してできた。
		進路の情報が的確につかめるように、進路指導室の整理・整頓を心がける。	A			
保健部	健康を自律的に管理できる力の育成	保健学習や委員会活動を通して、自らの健康について考えさせる。	A	A	A	◆保健学習では保健美化委員を中心としたものや、カウンセラーや外部講師による講話など各学年でバランスよく実施することができた。感染症対策については、健康観察や見回り等予防の徹底に努めた。
		自分の健康状態を管理し、感染症の予防に努める生活を指導する。	A			
農場部	農業クラブ活動の充実を図る	農業クラブの大会や各種コンテストなどの入賞を目指す。	A	A	A	◆日本学校農業クラブ全国大会意見発表の部に本校はじめて出場させることができた。資格取得では取得を目指さない生徒が多いため、今後どのように広報を行い受検させていくかが問題である。
		資格取得率の向上を目指す。80%以上：A　60～79%：B　59%以下：C	B			
第1学年部	学力の向上	評定平均4.0以上の人数を指標として、ひとりひとりの評定平均の向上を目指す。 Ａ：17人以上　　Ｂ：16人～11人　　Ｃ：10人以下	B	B	B	◆評定平均4.0以上の生徒の人数は、１学期13名、２学期18名、３学期は16名であった。 ◆資格取得にも熱心に取り組んだ。
第2学年部	学力の向上	進路選択の幅を拡げるため、積極的に資格取得に取り組むように指導する。	B	B	B	◆積極的に取り組む生徒も多くいたが、全体的なものにはならなかった。
		進路を考えさせる中で、自主的に学習に取り組ませ、個々の学力向上を目指す。評定4.0以上の生徒30%以上。	B			
第3学年部	進路の決定	生徒一人一人に応じた進路指導を心がけ、進路決定100%を目指す。 Ａ：100%　　Ｂ：～95%　　Ｃ：90%以下	B	B	B	◆就職に関しては、決定までに時間がかかった生徒もいたが、おおむね決定した。
国語科	日本語を正確に理解し、表現する能力の育成	漢字学習を継続して行い、語彙を増やす機会とする。 また、学年ごとの課題提出率を100%にする。	B	B	B	◆漢字学習のためのテキスト提出に一定の成果はあった。漢字検定の受験者は昨年度の1.5倍ほどになったが、合格者が少なかった。古典分野への親しみを持たせるために、暗唱等を課した。また文語文法の動詞の活用理解は昨年度よりも定着した感がある。
		漢字検定の受検者を増やし、合格率を高める。	C			
		古典分野に親しむ機会を充実させる。	A			
地歴公民科	学習習慣の確立	教科書に即したプリントとプロジェクターを活用し、テンポ良くわかる喜びを実感できる授業を工夫する。	B	B	B	◆教科書に即したプリントの穴埋めを全員でやるアクティブラーニングのスタイルができた。 ◆ＪＩＣＡのコンテストでは２年連続で学校賞を受賞した。また、個人賞受賞者も出た。
		ＪＩＣＡ国際協力中学生・高校生エッセイコンテストに応募し、ＳＤＧｓと関わる思考力・判断力・表現力を育てる。	A			
数学科	学力向上	演習補助プリントを年間20枚作成し、反復練習を充実させることで学力の定着をはかる	A	B	B	◆不認定生徒を減らせるよう、各定期考査の対策や放課後講習、長期休業中の補充など実施しているが、基礎学力不足の生徒もおり、かなり厳しい状況がある。不認定者が出た場合の追認の指導についても手が回らず苦労している。
		不認定生徒をゼロにする	B			
理科	学力向上	生徒が理科に対して興味を持ち、理解しやすい授業展開を工夫する。	B	B	B	◆授業内で小テスト等を実施し、学習内容の定着を図った。放課後の補講のついては小テストの結果が不十分な生徒を対象に行った。検定や資格習得に関する指導は今年度は行われなかったため、次年度では積極的な資格習得を促したい。
		小テストや問題演習を多く取り入れることで復習の機会をつくり、内容の定着を図る	A			
保健体育科	生涯体育につながる資質や能力の育成	意欲的・主体的に運動に取り組む。	B	B	B	◆個人差もあったが、全体的に意欲的に取り組めた。 ◆運動部加入者も少ないため、体育授業でもう少し体つくり運動等を取り入れ、体力向上を図る必要がある。
		各授業の20%は体力向上のための時間とする。	B			
家庭科	自立に必要な力の育成	実践的な力を身につけるために、授業時数の50%以上を実習・実験に充てる。	B	B	B	◆ＩＣＴを活用した授業を実施することで、理解が深まる部分があった。更に有効に活用できるように研修する必要がある。 ◆個人で取り組む実習は行えたが、グループ活動は実施しにくかったことが残念である。
		ＩＣＴを効果的に活用し、分かりやすい授業を構築する。	B			
英語科	基礎的な学力の定着	小テストを定期的に実施し、基本的な知識の定着を図る。平均点６割以上を目指す。	A	A	A	◆今年度は語彙力をつけることを目標に、小テストや課題テストなどの回数を増やした。また、口頭での練習やインタビュー、スキットなども取り入れ、英語を話す機会を多くし、発話する意欲を高めようと試みた。来年度はその内容と評価についてさらに工夫することが課題である。
		家庭学習の習慣を確立させるため、課題を出し提出を促す。	B			
芸術科	基礎技術を充実させ自ら表現しようとする意欲を育てる	生徒一人ひとりの能力の掌握に努め、基礎的な内容から高度な内容まで表現できる幅を広げさせる。	B	B	B	◆基礎的な内容だけでなく、各自の能力に応じて発展的な表現ができるように、課題を工夫した。 ◆表現活動を通して得られた知識の獲得を適切に評価できるように、指導と評価の分析に注力する。
		感性に立脚した知識を獲得させ、試行錯誤して深められる機会を設定する。	B			

農業科	基礎・基本の定着を意識した専門教育の充実	ＩＣＴ機器の活用機会を増やし、基礎を意識したわかりやすい授業を展開する。	B	B	B	◆写真や動画を投影して実習の振り返りや実験手順の解説などを行い、生徒の理解を深めることが出来た。次年度からのＢＹＯＤ実施に向け、さらに教員のＩＣＴスキルを高める必要がある。 ◆学年によって資格取得率に大きな差があった。上級学年になるにつれ進路実現を意識して資格取得に取り組む生徒が増えているため、今後は１年生の取得率向上に向けた取組を検討していきたい。
		専門教育で習得した知識・技術を資格取得に活かし、一人一つ以上の資格取得を目指す。 （取得率90%以上：Ａ　取得率80%以上：Ｂ　取得率80%未満：Ｃ）	C			
園芸科	専門教育への学習意欲の向上を図る	各専攻の学習や実習を充実させ、生徒が興味を持ち取り組む教科指導を行う。	B	B	B	◆新型コロナウィルス感染症の関係で、各種の事業が中止や規模縮小となったため、生徒の日頃の成果を十分に発揮させることができなかった。
		地域との連携事業を積極的に行い、生徒に自信を持たせる取り組みを行う。 事業参加数５以上：Ａ　　３～４：Ｂ　　２以下：Ｃ	B			
農芸化学科	特色を活かした専門教育の充実	教員の専門性を高め、各授業内容の充実を図る。	B	B	B	◆コロナ禍により地域連携や校外研修や社会人講師など未実施になったものが多く、生徒の学習機会が減ったことが残念である。また、タブレットの導入などＩＣＴによる授業展開についても検討が必要である。 ◆東祭や即売会などについては、各教員が責任を持って取り組むことができた。
		専門的な知識・技術が習得の深化を図ると共に、資格取得への意識を高め、合格率100%を目指す(100%ならＡ、100%未満95%以上ならＢ、それ以下ならＣとする)。	A			

学校運営協議会による評価	◆コロナ禍でも綾部高校では学校祭など教育活動は生き生きしている。 ◆探究活動における大学との連携の取組を通じて生徒は自信を深め、成長にもつながっているので、今後も生徒にはいろいろな体験の機会を与えることが大事である。 ◆産学連携の酒づくりのプロジェクトを通して、高校生が堂々と意見を発表できるようになるなど成長していく姿が見られた。 ◆綾部市シルバー人材センターの協力を得て、園芸部が菊人形を作成し、綾部市菊花展に出展された。先生方の熱意を感じた。 ◆小中学校との連携では、分析化学部が水生生物の採集体験を指導し、小中学生には刺激になった。 ◆ICT教育を充実させるための教員研修もできており、タブレットを活用した授業展開がしっかりとできている。 ◆クリーン作戦や外部講師を活用した授業等を通じて、SDGsを実践し、発信することができている。 ◆情報発信をしているが、それを受け手に見てもらう工夫が必要である。 ◆コロナの影響で部活動をはじめ様々な教育活動に制限がかかり、ストレスをため込んでいる生徒もいるので、生徒の心のサインをしっかり見る必要がある。 ◆地域の課題解決を教材として、地域に根ざした教育活動をより一層展開していくことも大事である。 ◆高校の特徴をどのように出していくのか、しっかり考えてアピールしていくべきである。 ◆米のブランド化を考えてみてはどうかと思う。
次年度に向けた改善の方向性	成果 ◆個に応じた丁寧な進路指導を低学年から行い、就職率100%を達成することができた。また、進学においては国立大学に1名合格することができた。 ◆タイムリーなホームページ更新や保護者メール配信を心がけた。全国農業高校・農業大学校デジタルコンテストホームページ部門で一次審査の結果、優秀と認められ京都府の代表に選ばれた。 ◆コロナであることがかえってICT機器の整備が進み、ICTを活用した授業改善や業務改善につなげることができた。令和4年度からのBYOD（全員タブレット購入）を見据えた研究を進めていくことができた。 ◆適応指導会議を計画的に、また、必要に応じて開催するなどにより、課題のある生徒が落ち着いて学習に取り組めるようになった。 ◆外部機関との連携の機会は少なかったが、産学連携の酒づくりプロジェクトや菊人形への出展など新たな取り組みを始めることができた。 ◆農業クラブの活動では意見発表の部で京都府と近畿で最優秀となり、2年ぶりに開催された日本学校農業クラブ全国大会に出場することができた。、 ◆分析化学部が全総文生物部門で発表した。 課題 ◆広報活動やオープンスクールを工夫して実施したが、生徒募集につながらなかった。 ◆BYOD導入に向けて取り組み来年度に向けて成果があったが、特定の教員に負担が集中した。 ◆コロナ感染の影響で、大学等での校外学習がほとんど実施できなかった。また、西町アンテナショップでの農作物・加工品販売が実施できなかった。 ◆4S運動は教職員の意識が高まっているが、さらに推進していく必要がある。